

第 12 回 分布の再生性, 多変量正規分布 (7.3–7.4)

村澤 康友

2025 年 11 月 7 日

今日のポイント

1. 独立に正規分布にしたがう確率変数の和は正規分布 (再生性).
2. 1 変量から多変量に正規分布を拡張する.
3. 多変量正規分布の線形変換は正規分布. したがって周辺分布も正規分布. 多変量正規分布では独立 \iff 無相関. また条件つき分布も正規分布.

目次

1	分布の再生性	1
1.1	畳み込み (p. 150)	1
1.2	再生性 (p. 151)	1
2	行列	2
2.1	行列とベクトル	2
2.2	ベクトルの内積	2
2.3	行列の演算	2
2.4	行列と連立 1 次方程式	2
3	行列式と逆行列	2
3.1	正方行列	2
3.2	行列式	3
3.3	逆行列	3
4	多変量正規分布	3
4.1	確率ベクトル	3
4.2	多変量標準正規分布 (p. 146)	3
4.3	多変量正規分布 (p. 147)	4
4.4	積率	4

5	多変量正規分布の性質	4
5.1	線形変換	4
5.2	独立と無相関	4
5.3	条件つき分布	5
6	今日のキーワード	6
7	次回までの準備	6

1 分布の再生性

1.1 畳み込み (p. 150)

定義 1. 独立な確率変数の和の分布を求めることを **畳み込み** という.

注 1. 畳み込みは mgf を用いるのが簡単.

定理 1. X と Y が独立なら

$$M_{X+Y}(t) = M_X(t)M_Y(t)$$

証明.

$$\begin{aligned} M_{X+Y}(t) &:= E\left(e^{t(X+Y)}\right) \\ &= E\left(e^{tX}e^{tY}\right) \\ &= E\left(e^{tX}\right)E\left(e^{tY}\right) \\ &= M_X(t)M_Y(t) \end{aligned}$$

□

1.2 再生性 (p. 151)

定義 2. 畳み込んでも分布の型が変わらない性質を **再生性** という.

例 1. 成功確率が等しい 2 項分布, ポアソン分布, 正規分布.

定理 2. $X \sim N(\mu_X, \sigma_X^2)$ と $Y \sim N(\mu_Y, \sigma_Y^2)$ が独立なら

$$X + Y \sim N(\mu_X + \mu_Y, \sigma_X^2 + \sigma_Y^2)$$

証明. 前定理より, $X + Y$ の mgf は

$$\begin{aligned} M_{X+Y}(t) &= M_X(t)M_Y(t) \\ &= \exp\left(\mu_X t + \frac{\sigma_X^2 t^2}{2}\right) \exp\left(\mu_Y t + \frac{\sigma_Y^2 t^2}{2}\right) \\ &= \exp\left((\mu_X + \mu_Y)t + \frac{(\sigma_X^2 + \sigma_Y^2)t^2}{2}\right) \end{aligned}$$

これは $N(\mu_X + \mu_Y, \sigma_X^2 + \sigma_Y^2)$ の mgf. □

2 行列

2.1 行列とベクトル

定義 3. $m \times n$ 行列は

$$\mathbf{A} := \begin{bmatrix} a_{1,1} & \cdots & a_{1,n} \\ \vdots & & \vdots \\ a_{m,1} & \cdots & a_{m,n} \end{bmatrix}$$

注 2. $\mathbf{A} := [a_{i,j}]$ とも書く.

定義 4. $1 \times n$ 行列を (n 次元) 行ベクトルという.

定義 5. $n \times 1$ 行列を (n 次元) 列ベクトルという.

2.2 ベクトルの内積

\mathbf{x}, \mathbf{y} を n 次元列ベクトルとする.

定義 6. \mathbf{x} と \mathbf{y} の内積は

$$(\mathbf{x}, \mathbf{y}) := \sum_{i=1}^n x_i y_i$$

注 3. $\mathbf{x} \cdot \mathbf{y}$, $\mathbf{x}'\mathbf{y}$ とも書く.

2.3 行列の演算

\mathbf{A}, \mathbf{B} を行列とする.

定義 7. $m \times n$ 行列 \mathbf{A}, \mathbf{B} の各 (i, j) 成分について $a_{i,j} = b_{i,j}$ なら \mathbf{A} と \mathbf{B} は等しいという.

定義 8. $m \times n$ 行列 \mathbf{A}, \mathbf{B} の和は

$$\mathbf{A} + \mathbf{B} := [a_{i,j} + b_{i,j}]$$

定義 9. スカラー α と \mathbf{A} のスカラー積は

$$\alpha \mathbf{A} := [\alpha a_{i,j}]$$

定義 10. $l \times m$ 行列 \mathbf{A} と $m \times n$ 行列 \mathbf{B} の積は

$$\mathbf{AB} := [(a_{i,\cdot}, b_{\cdot,j})]$$

注 4. 一般に $\mathbf{AB} \neq \mathbf{BA}$. そもそも $l \neq n$ なら \mathbf{BA} は定義できない.

定義 11. \mathbf{A} の転置は

$$\mathbf{A}' := [a_{j,i}]$$

2.4 行列と連立 1 次方程式

n 個の未知変数 x_1, \dots, x_n をもつ m 本の連立 1 次方程式は

$$\begin{aligned} a_{1,1}x_1 + \cdots + a_{1,n}x_n &= b_1 \\ &\vdots \\ a_{m,1}x_1 + \cdots + a_{m,n}x_n &= b_m \end{aligned}$$

次の行列・ベクトルを定義する.

$$\mathbf{A} := \begin{bmatrix} a_{1,1} & \cdots & a_{1,n} \\ \vdots & & \vdots \\ a_{m,1} & \cdots & a_{m,n} \end{bmatrix}, \quad \mathbf{x} := \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}$$

$$\mathbf{b} := \begin{pmatrix} b_1 \\ \vdots \\ b_m \end{pmatrix}$$

連立 1 次方程式は

$$\mathbf{Ax} = \mathbf{b}$$

3 行列式と逆行列

3.1 正方行列

定義 12. $n \times n$ 行列を n 次正方行列という.

定義 13. (n 次) 単位行列は

$$\mathbf{I}_n := \begin{bmatrix} 1 & & 0 \\ & \ddots & \\ 0 & & 1 \end{bmatrix}$$

3.2 行列式

A を n 次正方行列とする.

定義 14. A の行列式は

$$\det(A) := \sum_{p(\cdot) \in P} \text{sgn}(p(\cdot)) a_{1,p(1)} \cdots a_{n,p(n)}$$

ただし P は $\{1, \dots, n\}$ のすべての置換 (順列) の集合, $\text{sgn}(\cdot)$ は置換の符号を表す (偶置換なら $+1$, 奇置換なら -1).

例 2. $n = 2$ なら $P = \{(1, 2), (2, 1)\}$ より

$$\det(A) = a_{1,1}a_{2,2} - a_{1,2}a_{2,1}$$

2 元連立 1 次方程式は

$$\begin{aligned} a_{1,1}x_1 + a_{1,2}x_2 &= b_1 \\ a_{2,1}x_1 + a_{2,2}x_2 &= b_2 \end{aligned}$$

または

$$Ax = b$$

x_1 を消去すると

$$(a_{1,2}a_{2,1} - a_{1,1}a_{2,2})x_2 = a_{2,1}b_1 - a_{1,1}b_2$$

x_2 を消去すると

$$(a_{1,1}a_{2,2} - a_{1,2}a_{2,1})x_1 = a_{2,2}b_1 - a_{1,2}b_2$$

したがって解の存在の必要十分条件は $\det(A) \neq 0$.

3.3 逆行列

定義 15. $AB = BA = I_n$ となる B を A の逆行列という.

注 5. A の逆行列を A^{-1} と書く.

注 6. 連立 1 次方程式 $Ax = b$ の解は $x = A^{-1}b$.

練習 1. $n = 2$ なら

$$A^{-1} = \frac{1}{\det(A)} \begin{bmatrix} a_{2,2} & -a_{1,2} \\ -a_{2,1} & a_{1,1} \end{bmatrix}$$

となることを確かめなさい.

4 多変量正規分布

4.1 確率ベクトル

多変量解析では太字の大文字で行列, 太字の小文字でベクトル, 細字の小文字でスカラーを表し, 確率変数とその実現値の表記を区別しない.*1 x を n 次元確率ベクトルとする.

定義 16. x の平均ベクトルは

$$E(x) := \begin{pmatrix} E(x_1) \\ \vdots \\ E(x_n) \end{pmatrix}$$

注 7. μ と表す.

定義 17. x の分散共分散行列は

$$\text{var}(x) := E((x - E(x))(x - E(x))')$$

注 8. Σ と表す.

注 9. Σ の (i, j) 成分は $\sigma_{i,j} = \text{cov}(x_i, x_j)$.

4.2 多変量標準正規分布 (p. 146)

定義 18. n 変量標準正規分布の同時 pdf は, 任意の $z \in \mathbb{R}^n$ について

$$f(z) := (2\pi)^{-n/2} \exp\left(-\frac{z'z}{2}\right)$$

定理 3. z が n 変量標準正規分布にしたがうなら, z_1, \dots, z_n は独立な $N(0, 1)$ にしたがう.

証明. z の同時 pdf を式変形すると

$$\begin{aligned} f(z) &= (2\pi)^{-n/2} \exp\left(-\frac{z_1^2 + \cdots + z_n^2}{2}\right) \\ &= (2\pi)^{-n/2} \exp\left(-\frac{z_1^2}{2}\right) \cdots \exp\left(-\frac{z_n^2}{2}\right) \\ &= \frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{-z_1^2/2} \cdots \frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{-z_n^2/2} \\ &= \phi(z_1) \cdots \phi(z_n) \end{aligned}$$

したがって z_1, \dots, z_n は独立な $N(0, 1)$. □

*1 多変量解析は回帰分析・主成分分析・因子分析・判別分析などを含む多変量データの分析手法の総称であり, 多変量正規分布の理論を基礎とする.

系 1. z が n 変量標準正規分布にしたがうなら

$$\begin{aligned} E(z) &= \mathbf{0} \\ \text{var}(z) &= \mathbf{I}_n \end{aligned}$$

4.3 多変量正規分布 (p. 147)

定義 19. n 変量正規分布の同時 pdf は, 任意の $x \in \mathbb{R}^n$ について

$$f(x) := (2\pi)^{-n/2} \det(\Sigma)^{-1/2} \exp\left(-\frac{1}{2}(x - \mu)' \Sigma^{-1}(x - \mu)\right)$$

ただし Σ は対称行列.

注 10. $N(\mu, \Sigma)$ と書く. $N(\mathbf{0}, \mathbf{I}_n)$ は n 変量標準正規分布.

注 11. $n = 2$ なら

$$x := \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix}, \quad \mu := \begin{pmatrix} \mu_1 \\ \mu_2 \end{pmatrix}, \quad \Sigma := \begin{bmatrix} \sigma_1^2 & \sigma_{12} \\ \sigma_{21} & \sigma_2^2 \end{bmatrix}$$

行列式と逆行列は

$$\begin{aligned} \det(\Sigma) &= \sigma_1^2 \sigma_2^2 - \sigma_{12}^2 \\ \Sigma^{-1} &= \frac{1}{\sigma_1^2 \sigma_2^2 - \sigma_{12}^2} \begin{bmatrix} \sigma_2^2 & -\sigma_{12} \\ -\sigma_{12} & \sigma_1^2 \end{bmatrix} \end{aligned}$$

指数部は楕円の方程式.

例 3. 2 変量正規分布の同時 pdf (3D グラフ・等高線) と 2 変量正規乱数の散布図は図 1 の通り.

4.4 積率

x を n 次元確率ベクトルとする.

定義 20. x の積率母関数 (mgf) は

$$M_x(t) := E\left(e^{t'x}\right)$$

定理 4. $N(\mu, \Sigma)$ の mgf は, 任意の $t \in \mathbb{R}^n$ について

$$M(t) = \exp\left(\mu't + \frac{t'\Sigma t}{2}\right)$$

証明. 省略. \square

定理 5. $x \sim N(\mu, \Sigma)$ なら

$$\begin{aligned} E(x) &= \mu \\ \text{var}(x) &= \Sigma \end{aligned}$$

証明. mgf を用いるのが簡単. \square

5 多変量正規分布の性質

5.1 線形変換

定理 6. $x \sim N(\mu, \Sigma)$ なら

$$Ax + b \sim N(A\mu + b, A\Sigma A')$$

証明. $Ax + b$ の mgf は

$$\begin{aligned} M_{Ax+b}(t) &:= E\left(e^{t'(Ax+b)}\right) \\ &= E\left(e^{t'Ax}\right) e^{t'b} \\ &= M_x(A't) e^{b't} \\ &= \exp\left(\mu'(A't) + \frac{(A't)'\Sigma(A't)}{2}\right) e^{b't} \\ &= \exp\left((A\mu + b)'t + \frac{t'(A\Sigma A')t}{2}\right) \end{aligned}$$

これは $N(A\mu + b, A\Sigma A')$ の mgf. \square

系 2. $x \sim N(\mu, \Sigma)$ なら $i = 1, \dots, n$ について

$$x_i \sim N(\mu_i, \sigma_i^2)$$

証明. 前定理において

$$\begin{aligned} A &:= (1, 0, \dots, 0) \\ b &:= 0 \end{aligned}$$

などとすればよい. \square

5.2 独立と無相関

定理 7. $x \sim N(\mu, \Sigma)$ なら

$$x_1, \dots, x_n \text{ は独立} \iff x_1, \dots, x_n \text{ は無相関}$$

証明. “ \implies ” すでに見た (正規分布でなくても成立). “ \impliedby ” 無相関なので Σ は対角. したがって

$$\begin{aligned} \det(\Sigma) &= \sigma_1^2 \cdots \sigma_n^2 \\ \Sigma^{-1} &= \begin{bmatrix} 1/\sigma_1^2 & & 0 \\ & \ddots & \\ 0 & & 1/\sigma_n^2 \end{bmatrix} \end{aligned}$$

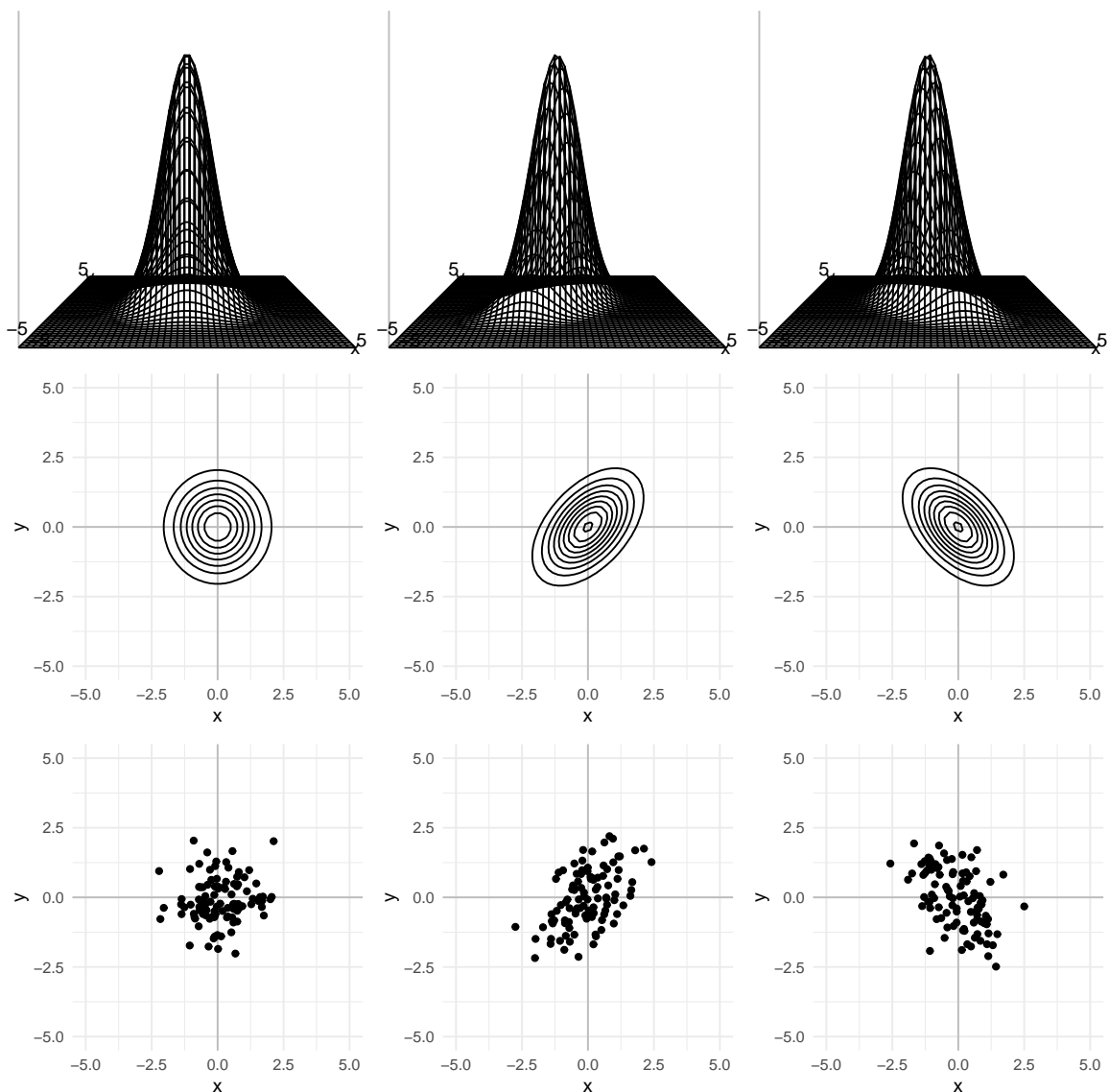


図1 2変量正規分布の同時 pdf (3D グラフ・等高線) と 2 変量正規乱数の散布図

同時 pdf に代入すると, 任意の $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n$ について

$$\begin{aligned}
 f(\mathbf{x}) &:= (2\pi)^{-n/2} \det(\Sigma)^{-1/2} \\
 &\quad \exp\left(-\frac{1}{2}(\mathbf{x} - \boldsymbol{\mu})' \Sigma^{-1}(\mathbf{x} - \boldsymbol{\mu})\right) \\
 &= (2\pi)^{-n/2} (\sigma_1^2 \cdots \sigma_n^2)^{-1/2} \\
 &\quad \exp\left(-\frac{1}{2} \sum_{i=1}^n \frac{(x_i - \mu_i)^2}{\sigma_i^2}\right) \\
 &= (2\pi)^{-1/2} (\sigma_1^2)^{-1/2} \exp\left(-\frac{(x_1 - \mu_1)^2}{2\sigma_1^2}\right) \cdots \\
 &\quad (2\pi)^{-1/2} (\sigma_n^2)^{-1/2} \exp\left(-\frac{(x_n - \mu_n)^2}{2\sigma_n^2}\right) \\
 &= f_1(x_1) \cdots f_n(x_n)
 \end{aligned}$$

ただし $f_1(\cdot), \dots, f_n(\cdot)$ は x_1, \dots, x_n の周辺 pdf.

□

5.3 条件つき分布

定理 8. $(x'_1, x'_2)' \sim N(\boldsymbol{\mu}, \Sigma)$ なら

$$x_1 | x_2 \sim N(\boldsymbol{\mu}_{1|2}, \Sigma_{11|2})$$

ただし

$$\boldsymbol{\mu}_{1|2} := \boldsymbol{\mu}_1 + \Sigma_{12} \Sigma_{22}^{-1} (x_2 - \mu_2)$$

$$\Sigma_{11|2} := \Sigma_{11} - \Sigma_{12} \Sigma_{22}^{-1} \Sigma_{21}$$

証明. 条件つき pdf の定義より

$$f_{1|2}(\boldsymbol{x}_1|\boldsymbol{x}_2) := \frac{f_{1,2}(\boldsymbol{x}_1, \boldsymbol{x}_2)}{f_2(\boldsymbol{x}_2)}$$

これをひたすら計算する (かなり面倒). \square

注 12. この結果が回帰分析の理論的基礎となる.

6 今日のキーワード

畳み込み, 再生性 (2 項分布, ポアソン分布, 正規分布), 平均ベクトル, 分散共分散行列, n 変量標準正規分布, n 変量正規分布, 正規分布の性質 (線形変換, 周辺分布, 独立と無相関, 条件つき分布)

7 次回までの準備

復習 教科書第 7 章 3–4 節, 復習テスト 12

予習 教科書第 8 章